歴史地理学　51－3（245）44～61　2009. 6

沖縄八重山地方における猪垣築造の社会的背景

蛯　原　一　平

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．役人統治のなかでの猪垣築造と維持管理
　(1) 統治体制と新村建設
　(2) 猪垣の築造経緯
　(3) 維持管理に関する役人の指示
Ⅲ．石垣島東部諸村での猪垣築造と維持管理の実態
　(1) 猪垣拡張と役人による見分
　(2) 築造における村間の協力
Ⅳ．西表島西部の猪垣遺構の構造と配置形態
　(1) 諸村の概況
　(2) 祖納岳山麓の猪垣の構造
　(3) 西部３村での猪垣の配置形態
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

農作物を野生動物による被害から守るための防除技術は，水利灌漑などと並び，農業では欠かすことのできない重要な技術である。猪垣（ししがき）（猪鹿垣，しし土手などとも呼ばれる）はその一つで，石垣や土塁などを農地の周囲に築き，野生動物の侵入を防ぐものである[1]。なかには数十kmに及ぶものもあるが，そのほとんどは放棄されて久しく，一部しか残っていないのが現状である。しかし，近年，中山間地域における獣害問題が深刻化するなか，猪垣は伝統的防除技術として注目されつつある[2]。また，野生動物と共存してきた地域の歴史・文化を学ぶための具体的な題材となりうるものであり，エコツーリズムでの活用も期待される[3]。

猪垣の存在については齋藤[4]によって早くから報告され，現地調査を踏まえた猪垣の構造や立地場所に関する記録が各地でなされてきた[5]。また，岡本[6]は各地の猪垣の事例を紹介しながら全国的な猪垣の分布や築造年代について論じている。そのなかで，北海道や日本海側では猪垣がみられないものの，中部地方以西，特に長野県，熊野地方，長崎県に分布が濃密であること，築造年代は江戸時代全期にわたっているが，特に元禄期と天明から文化頃までの二つのピークがあることを指摘している。矢ヶ﨑も一連の研究[7]において，郷土誌など文献資料に基づき，各地での猪垣築造の様子や維持管理のされ方について明らかにしつつ，全国的な分布についても論じている。

このように，どこに，どのような猪垣があるのかといったことや，それらがいつ頃，どのように住民達によって築かれ，管理されてきたのかということが，これまで各地の事例をもとに明らかにされてきた。それらの研究においては，住民達が共同作業によって猪垣を築いたことや管理に関して村内で取り決めがあったことなどがしばしば述べられてきた。しかしながら，その労力や資材がどのように調達されたのかや，取り決めに影響した

キーワード：猪垣，八重山地方，役人統治，明和の大津波，人口変化

であろう当事者達の社会関係などについては具体的に論じられることは少ない。千葉[8]は伊那盆地において，猪垣が築かれなかった集落では，猪垣のあった集落に比べ多くの威銃が備えられていたことを指摘しつつ，「御館などと呼ばれる大農経営とその支配下にある小農とからできている村の多かつた天竜川の東の村々では，各豪農の個人猪垣が発達していたために，かえつて全村的な防禦施設が成立しなかつたという社会事情も考えられる」と述べている（引用文は原文のまま）。つまり，猪垣の分布や築造要因を考えるには，それらが築かれた時代，その地域の社会的背景にも注目する必要があるといえる。

本稿で対象とする沖縄南西部，八重山群島のうち，イノシシが棲息する石垣島と西表島は，矢ヶ崎[9]が指摘するように猪垣の築造が盛んになされた島々であり，その築造要因が注目される。これらの島で猪垣が築かれたのは琉球王府の統治下にあった1700年代から1800年代までの間であり，当時は貢納と関わり，各村での村人達の日常的労働にまで地方役人の指導が及んでいた。そのため，猪垣の築造過程において，村人だけでなく，地方役人を含む為政者達の役割も大きかったと考えられる。しかし，当地方では猪垣の分布や築造経緯に言及されることはあっても，例えば，村人達と地方役人との交渉過程など，築造をめぐる社会的背景については，これまで具体的に明らかにされてこなかった。そこで，本稿では村人達に対する為政者側の働きかけに着目し，築造が盛んになされた近世後期（1700年代から1800年代）における八重山地方での猪垣築造の社会的背景について論じたい。

ところで，築造や維持管理の在り方について実証的に論じるためには，そこでの猪垣の形態や構造など実態の把握が必要不可欠である。しかし，当地方では猪垣遺構の現地調査がほとんどおこなわれておらず，実際にどのような猪垣が築かれていたのかという点について不明瞭なものが多い。そこで，本研究では猪垣に関係する史資料だけに依拠するのではなく，現存する猪垣遺構の現地調査の結果も用いる。

本稿ではまず，琉球王府や地方行政庁関連の史料を中心に当地方で築造が広まる経緯や維持管理方法について述べ，それらに対し地方役人がどのように関わっていたのかを考察する。さらに，猪垣遺構の現地調査から猪垣の構造や配置形態を明らかにする。

Ⅱ．役人統治のなかでの猪垣築造と維持管理

(1) 統治体制と新村建設

本稿の対象とする八重山地方は，琉球王国の中心であった沖縄島から直線にして400km以上離れているが（図１），猪垣が築かれた近世期にはその統治が及んでいた。とりわけ八重山社会に大きな影響を与えていたのは人頭配賦税（通称人頭税）と呼ばれる税制度であり，それに関わる統治体制であった。先島（宮古・八重山）地方では，沖縄の他地域と

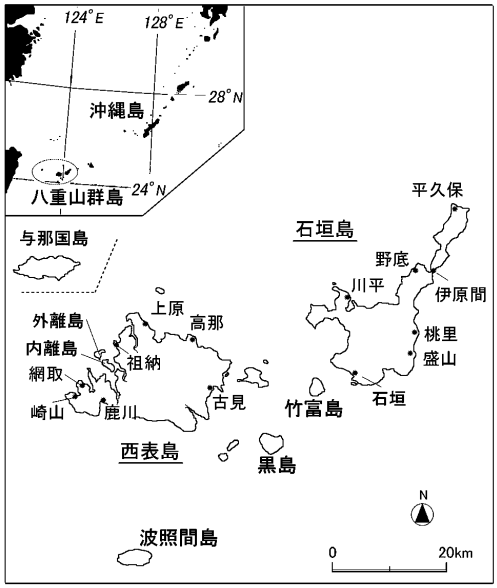


図１　八重山地方の位置と主な地名

異なり，廃藩（琉）置県（1879年）の数十年も後の1903年まで人頭税が課せられていた。

人頭税は村単位で貢納を課し，その貢納額をある年齢以上の村人で頭割りするというものであった。そのため諸村の農民（百姓）が自由に村外へ移住することは禁じられていた。また，居住地だけでなく，日常的な労働や行事，風習など暮らしの様々な側面にも統制が及んでいた。諸村の村番所に首里大屋古（しゅりおおやこ）や与人（ゆんちゅ），目差（めさし）といった地方役人が詰めており，彼らは，間切（まぎり）（琉球王国における行政区画で貢納上納の単位）の頭（かしら）と王府派遣の在番を頂点とした蔵元（くらもと）（地方行政庁）の管理下で村人達に農作業などの日常的な指示を与えていた。あつかい村（赴任先）における村人達の年貢上納の完納は地方役人の義務とされ，村人達の農事督励にあたっていた。とりわけ，1728年に三司官という王府の要職に就いた蔡温（具志頭親方）は，集約的な農法への転換や農業監督の強化などを目的に，1734年，「農務帳」を八重山地方も含めた王国全域に布達した。このような農本主義を基軸とした自給化政策を採ることで窮迫状況にあった王国の政治体制の安定化を図ろうとしていた[10]。また，従来の祭祀，生活風習のなかには，農作業の妨げや多大な出費を伴うといった理由から取り締まりの対象となったり，改められたりしたものもあった[11]。

それら政治状況と前後し，八重山地方では1700年代前半から人口が急激に増加していた（図２）。そして，村の人口動態に差が生じ，過密状態の村が出てくると，役人の統制のもと別村へ移住させたり（寄人（よせびと），寄百姓（よせひゃくしょう）などと称される），新村の建設（村建て）がなさるようになった。特に，面積が広く，水に恵まれた石垣島や西表島へは，人口が多く耕地が不

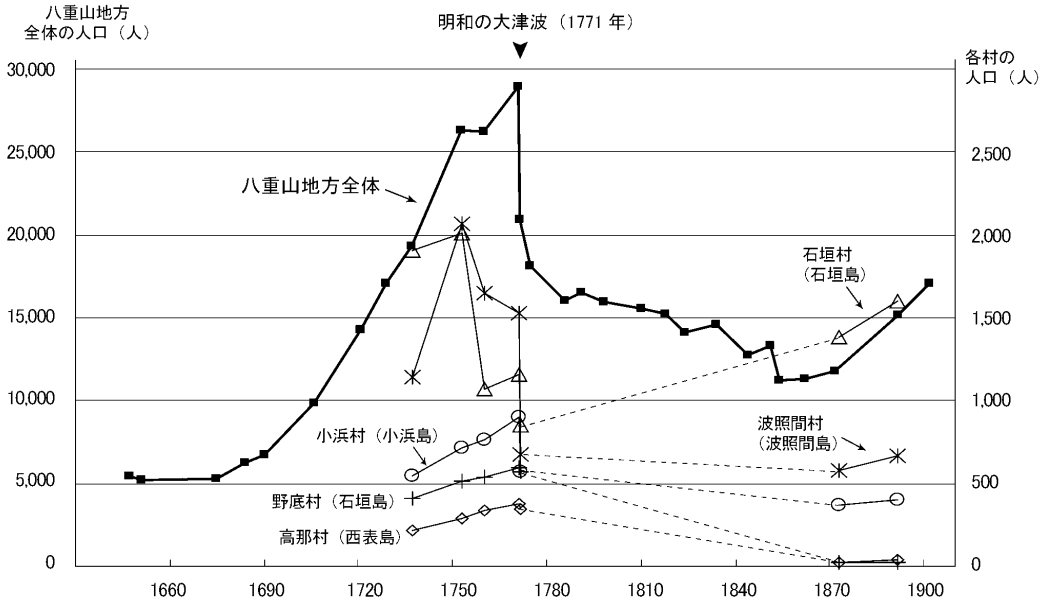


図２　八重山地方全体および諸村の人口動態

注）波照間村は行政村であり，波照間村の他，平田村など数村の枝村を含む

資料：『八重山年来記』（石垣市史叢書13，1999），『参遣状』（石垣市史叢書9，1995），『大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』（石垣市史叢書12，1998），『琉球八重山嶋取調書（全）』（沖縄研究資料21，法政大学沖縄文化研究所，2004），「沖縄県統計集成」（『沖縄県史第20巻　資料編10』，1967）により作成。

足していた島から寄人が幾度もなされた[12]。

ところが1771年，明和の大津波と呼ばれる津波が先島地方を襲い，これを境に八重山地方の人口が激減した。その後，人頭税廃止（1903年）まで人口が回復することはなかった。この津波による直接的な死者は１万人を超えたと伝えられ，特に石垣島では田畑や家屋，牛馬など家畜の被害も甚大であった[13]。その後，人口が回復しなかった要因として，熱帯性マラリアの流行[14] に加えて，人口減少を食い止めるための抜本的な政策がとられなかったこと[15] などが指摘されている。しかし，人口減少にもかかわらず，貢納額はほとんど変えられなかった。さらに，地方役人による恣意的な労働搾取や違法な税の取り立てといった不正が横行していたこともあり，人頭税が廃止されるまで多くの諸村が慢性的な疲弊状態にあったとされる[16]。

以上のように，18世紀から19世紀にかけ，八重山地方の社会状況は大津波の前後で大きく変化していた。そして，図２に示したように人口動態に関しては，大津波以前の急激な人口増加期，大津波後しばらくの間の急激な人口減少期，1780年代から1860年頃までの低落期，さらに，それ以降の微増に転じた時期という四つに大別できる[17]。このような社会状況の変化に伴い，猪垣がどのように築造され，維持されていたのかを以下において述べたい。

(2) 猪垣の築造経緯

八重山地方において猪垣の築造年代を伝える史料は多くないが，最も古いものの一つが，新村建設に関する首里の王府と蔵元とのやりとりの中にでてくる。1732年，石垣島の野底（のそこ）村，桃里（とうざと）村，そして西表島の高那（たかな）村という３村を村建てしたいという申し出が蔵元の在番と頭から首里の王府へ出された。それに対する王府側の返答のなかに，村建ての訴えを認めた上で，「依之頭三人江村越之手当相尋候処、村屋敷構并畠拵猪垣用水等、島中ヨリ加勢申付候ハヽ、早々村越可罷成由申出候、寄百姓自分ニ而諸事相調申事候ハヽ、急二者引越罷成不申筈候間、弥三人申出通、諸事加勢可被申付候」とある[18]。蔵元の頭へ村建てに関し必要な手配を尋ねたところ，村屋敷や畑地造成に加え，猪垣築造，用水整備が必要であるが，移住させる村人達ではまかないきれない。そのため他村から加勢させることで早く引越しできるようにしたい，との返事があった。そこで，村建てを許可するとともに，それら手配をきちんとするよう王府側から念を押していたのである。村建てとそれに伴う畑の開墾に際し，猪垣築造が用水整備と同等に必要不可欠のものであると王府や蔵元など為政者側は考えていたことが分かる。

また，西表島西部の崎山（さきやま）村（1948年廃村）も1755年[19] に新たに建てられた村である。ここで廃村以前（昭和初期）暮らしていた川平永美氏は，自ら記した生活誌のなかで父から伝え聞いた話などをまとめている。そのなかで，崎山村周囲の猪垣に関して「ヌバン（最初に村建てした場所）から移って[20] 何年か後，猪の害が激しいというので石垣を積んで猪垣を作ることになりました。これには祖納・干立・舟浮三村の人を動員して作ったということです。琉球国王に陳情して許可されたものでありました。」と，先ほどの３村の村建てに関する公文書と共通する話が伝承されていたことを記している[21]。崎山村の隣にあった網取村（1972年廃村）は新村でない。しかし，同様に生活誌をまとめた元網取村住民の山田武男氏も，網取村で田畑を守るための長大な「柵垣」が造られたのは，崎山村が村建てされた頃だと伝承されていたことを述べている[22]。

また，これら崎山村や網取村の東側には，慶田城村や西表村といった古村があった。その中心地であった祖納（そない）村での猪垣築造については，村の有力氏が18世紀後半にまとめた地

方伝承書『慶来慶田城由来記』[23] において以下のように記されている（□は不詳文字，読点や送りがな等の表記は引用した資料に従う，以下同じ）。

> 西表村囲并山猪垣瀬之儀、昔、祖納計囲置来候処、仲比ヨリ苧積前ヨリ直ク前泊御嶽之本之浜江囲置来、其後ニ与那田矼口ヨリ田之あつら便り真山浜涯江差通せ置き候処、内離・外離ヨリ冬向はんつ芋之砌、天気悪敷弐三日打込□□物毎ニ差支ニ付、乾隆三拾五壬寅年ヨリ村中ヨリ祖納嵩開地之訟出ニ付、御達被下作置候事

西表村の住民は祖納の向かいにある内離（うちばなれ）島，外離（そとばなれ）島という離れ島[24] へ甘藷（「はんつ芋」）作りに舟で通っていた。しかし，冬期に海が荒れて村に帰られないことがあり，不便なので，それまで村周りを囲んでいた小規模な垣（柵）を拡張し，祖納岳の開墾をしたいという訴えが1770（乾隆35）年に村から出されたのである。

これら記録や伝承からは，当地方で人口が増加していた1700年代中頃を中心に，新村，古村にかかわらず，幾つかの村で猪垣の築造がなされたことが分かる。当時，盛んであった村建てにおいて，猪垣は村必須の社会基盤と為政者達によって認識され，村ごとでの猪垣築造が一般化していた様子が窺われる。それは村人からの陳情をうけ，王府側の許可のもとおこなわれていたが，近隣の村人と共同で築かれる場合もあり，そのための労力の動員が蔵元の指示によってなされていたのである。

(3) 維持管理に関する役人の指示

猪垣に破損箇所がわずかでもあれば，動物に侵入され，防御効果が大きく失われる。そのため細かな点検作業が猪垣を維持していく上で必要である。八重山地方では，猪垣の維持管理に対しても役人が村人達に指示していた。

琉球王府統治時代，王府は中央から離れた先島地方へ検使を幾度か派遣し，蔵元体制や諸村での生活風習を点検していた。派遣された検使は「規模帳」を布達することで，役人や村人達に対して改善点を具体的に指示していた。そのような規模帳の一つ，1767年に派遣された与世山親方による『与世山親方八重山島規模帳』[25] では，以下のように大人数でのイノシシ狩りの禁止とともに猪垣の堅持を命じている。

> 毎年猪狩之時、村々ヨリ多人数相揃、狩戻り段々行列ニ而我増支度を争造佐ヶ間敷儀有之候付、去年ヨリ被召留置由候、尤猪垣させ堅固ニ囲置候ハ、右通間狩ニハ不及候処無其儀、毎年無益之造佐不可然候間、垣之儀随分入念相調、小破之時則々加修甫、右狩之儀以後共可召留事

また，同史料の別箇所[26] には，「年ニ壱度嶽々掃除并猪垣修甫之時、男札持人出来ニ而みき作致持参、一所ニ相集り手隙を費徒呑尽し候村も有之由不宜候間、向後右体之造佐可召留事」ともある。１年に１度おこなわれていた猪垣補修作業の後の慰労会をイノシシ狩り同様，無駄な浪費とみなし，慎むよう戒めている。

このように年に１度，猪垣の補修作業が村人達によってなされていたが，それ以外の日常的な見廻りも役人側が指示していたのである。ただし，それはイノシシ害を防ぎ，生産を確保するためというよりは，浪費を伴う村人達のイノシシ狩りをやめさせ，倹約を勧めようという勧農政策的な意図からであった。

ところが，この規模帳が布達された数年後の1771年に大津波が起こった。この大津波は猪垣にも直接的な損壊を与えたと思われる。

『大波寄揚候次第』[27] には，八重山全体の被害状況を伝えるため蔵元の在番が首里の御物奉公所へ宛てた「覚」がある。そこに「且猪垣五千七百間余、牛馬牧弐千九百間余被引崩候」という記述がみられる。1間を6尺とするなら，実に10km余の猪垣が損壊したことになる。

琉球王府が編纂した歴史書『球陽』からは，多くの村で大津波後しばらくして，荒廃していた猪垣の補修がなされたことを窺い知ることができる。そのような補修工事において何らかの貢献をなしたものを王府が褒賞しており，それぞれの事項がそこに記されている[28]（表1）。

例えば，『巻二十』の1832年（尚灝王29年壬辰）の出来事として，「八重山島（石垣島）川平村の田多仁屋の善行を褒嘉して爵位を頒賜す」というくだりがある（表1③）。褒賞理由の一つに，「川平村に、岸原より字知也那崎の海涯に至るまで山猪を防ぐの垣有り、長さ485尋・高さ5尺。昔に在りて、垣を築くに石を以てす。その後漸く壊れ、毎年多く夫役を費やし、木を用つて柵を修し、以て山猪を防ぐも、尚稼穡を侵喰するに有り。民、食継がず。去年4月に於て、村民旧式に依循し、石を築きて垣を為る。是の時、田多、大米四石一斗五升を発給して勧励す。即ち村民等、気力を振ひ起し、速に築き竣るを得たり。時に厥の後より猪の垣中に侵入すること無く、永く益を村に貽す。」とある[29]。また，西表島古見村の新里なる人物も，西表島の安良の損壊していた猪垣を修復した時に「焼酎五十沸・猪三疋・醤油七沸・麦一石七斗五升・神酒中壷十個・大米二石七斗五升」を提供し，皆を鼓舞したということで1843年に褒賞されている（表1④）。

石垣島平久保村の前盛筑頭之（筑登之は琉球王府の士族に対する位の一つ）らの場合（表1⑥），「猪柵」と書かれ，石垣を主体とした猪垣とは異なっていたと思われるが，い

表1　八重山地方における猪垣補修に係る褒賞事項

番号	年号	項目	功績（猪垣関係）
①	1792年 ［尚穆王41年壬子］	八重山島平久保村の耕作筆者野国の善行を褒賞す（巻十八）	石垣を新しく築造 （石垣島）
②	1828年 ［尚灝王25年戊子］	八重山崎山村の平良仁屋の善行を褒嘉して爵位を賜ふ（巻二十）	猪垣の補修 （西表島）
③	1832年 ［尚灝王29年壬辰］	八重山島川平村の田多仁屋の善行を褒嘉して爵位を頒賜す（巻二十）	猪垣の補修 （石垣島）
④	1843年 ［尚育王9年癸卯］	八重山島古見村の新里の功労を褒嘉して以て爵位を賜ふ（巻二十一）	猪垣の補修 （西表島）
⑤	1849年 ［尚泰王2年己酉］	八重山島崎山村の稲福仁屋の善行を褒嘉して爵位を賞賜す（巻二十二）	猪垣の築造 （西表島）
⑥	1852 ［尚泰王5年壬子］	八重山鳥平久保村の前盛筑頭之の功労を褒嘉して爵位を賞賜す（巻二十二）	猪柵を築立 （石垣島）
⑦	1855年 ［尚泰王8年乙卯］	八重山鳥平久保村の大濱仁屋を褒嘉して爵位を賞賜す（巻二十二）	猪柵を設建 （石垣島）
⑧	1857年 ［尚泰王10年丁巳］	八重山島崎枝村の加弥石垣を褒嘉して赤冠を賞賜す（巻二十二）	猪垣の補修 （石垣島）
⑨	1862年 ［尚泰王15年壬戌］	八重山島白保村の平田筑登之ら五名を褒嘉して各爵位を賜ふ（巻二十二）	猪柵を築く （石垣島）

『球陽　読み下し編』（1978）より作成

ずれも放棄されていた猪柵を再び修復する時に寄進をおこなったということで，1852年に褒賞されている。この他，1792年の平久保村の耕作筆者野国（耕作筆者は各村におかれ，村人達の農作業の管理をおこなう役人）の場合（表１①），「八重山島平久保村は民疲れ財乏し。（中略）猪垣無きの場に至りては、石墻を築起して、以て稼穡を為す」とあり，新たに猪垣が築かれた。

これらにおいて，「民，食継がず」や「民疲れ財乏し」と記されており，当時の困窮した暮らしぶりが分かるが，猪垣が放棄状態にあり，イノシシの被害が甚大であったことがその原因の一つであった。そこで，耕作筆者など村役人や士族らが中心になり，猪垣の修理や新たな築造がおこなわれたのである。琉球王府はそのような人物達を褒賞することで，猪垣の築造（再建）を図ろうとしていた。

また，翁長親方が検使として八重山地方に派遣され，翌1858年に布達された『翁長親方八重山島規模帳』[30] には，「村々猪垣破所有之、猪ニ芋畠逢聊爾、飯料見賦り及相違候所茂有之由候付。此節修甫申付置候間、以来小破之節則々致修甫候様可取計事」とある。この条文のうち，日常的な見廻りや補修を命じた後半の部分は，先にみた与世山親方の規模帳でも確認できるが，その理由について記した前半部分は若干異なっている。すなわち，与世山親方の時は，無駄な浪費を伴うイノシシ狩りを禁じるためであったのに対し，この翁長親方のものでは，イモ畑の被害防御という食糧確保の目的がより明確に掲げられている。

さらに，1874年に富川親方が派遣されるが，この時には猪垣の見廻りをおこなう役職が各村で決められていた。『富川親方八重山島諸村公事帳』[31]（1875年布達）によると，それまでの各村の百姓役目（村の百姓の内から選出される役職）が多すぎるため，兼務させたり，廃止させたり，人数を新たに定めた条文がある。そこに「一、猪垣当（いがきあたり）之儀、毎日猪垣見廻損所有り之候ハヽ則々加修補、大破有之節者早速役人方江申出修補可致候也」という記述がみられる。

イノシシがおらず，猪垣のない島の村では当然，この役職は設けられなかったが，同じ石垣島，西表島内であっても村ごとにその数は異なった（表２）。特に，西表島西部にあった西表村と崎山村はそれぞれ９人と多い。この西表村というのは行政村であり，後述するように，そのなかには親村（村番所のある村）である祖納村の他，舟浮村や成屋村という枝村を含んでいる。また，崎山村も，親村である崎山村の他，網取村と鹿川村を含んでいる。矢ヶ崎は，この数の違いを「多くの枝村をもつことによるとみられる」としている[32]。しかし，それでも各村当り３人となり，なお他村に比べて多い。また，２人とされている村でも，例えば石垣島の川平村は２村，西表島の上原村も３村を併せたものであり，猪垣当の人数の違いは村の数のみによって決められていたわけではない。その詳細な検討には，少なくとも各村で築かれていた猪垣の実態に目を向ける必要があるだろう。

このように，村ごとの人数の違いの根拠が明確ではないものの，1800年代後半の八重山地方では，担当役職を設けて日常的な猪垣の

表２　村ごとの猪垣当の人数（1875年）

村名	各村当りの猪垣当の人数（人）
（石垣島）新川・石垣・大川・登野城・真栄里・平得・大浜・宮良・白保・川平・平久保・伊原間・祥海 （西表島）古見・鳩間・上原・高那	2
（石垣島）盛山・桃里・野底・崎枝・名蔵 （西表島）南風見・仲間	1
（西表島）西表・崎山	9
竹富・新城・小浜・波照間・黒島・与那国島	0

『富川親方八重山島諸村公事帳』（石垣市史叢書３，1992, 20～24頁）より作成

見廻りをおこなうように，維持管理が制度化されていたことが分かる。

また，1897（明治30）年，西表島崎山村の村頭[33]が書き記した日記『必要書』[34]には，稲刈り直前の6月5日に，崎山村，網取村，鹿川村の各村で，村人達が共同で猪垣の補修作業をおこなったことが記されている。この頃にも，先程の与世山親方の巡検時（1767年）などと同様，村ごとに猪垣の補修作業もおこなわれていたのである。

Ⅲ．石垣島東部諸村での猪垣築造と維持管理の実態

（1）猪垣拡張と役人による見分

これまで，猪垣の築造や維持管理に対する蔵元や王府派遣の検使など為政者側の指示内容について述べてきた。次に，村での地方役人と村人達との猪垣をめぐる交渉過程の実態を『目差役被仰付候以来日記』[35]（以下「日記」と称す）から明らかにしたい。

本史料は，崎原（松茂氏）當貴氏（以下當貴と記す）が，石垣島東部にあった桃里村（1733年村建て）の目差に任じられ，赴任した1876（光緒2）年から1878（同4）年までの出来事を記した役人日記である。得能[36]は，本書を用いて寄人や敷地替（村の引越し）の実態について報告している。先の図2でみたように，この日記が記された頃は，石垣島の人口が微増しつつある頃であった。さらに，富川親方の巡検（1874年）があった数年後のことであり，当時は見廻りをおこなう猪垣当も定められていたと考えられる。

この桃里村の属地の一つに盛山という場所があり，そこが1785年，痩せ地ばかりで窮していた冨里村の敷地（屋敷や農地を併せた総称）とされた[37]。その時，冨里村は盛山村と名を変え，やがて桃里村の枝村とされた。

その盛山村で，寄人がおこなわれ，それに伴い1877年1月に以下のような猪垣拡張の「口上覚」が出された。

恐申上候、盛山村猪垣之儀、惣長千九百尋所持仕為申事御座候処、去年白保・宮良・大浜三ヶ村ヨリ正男八人寄人被仰付候付、別紙絵図之通今千七百六尋程築広不申者、右寄人共定法畠方明開方不相叶事御座候処、無人足之所故何共不及力、礑与差支居申事御座候、依之奉訟候儀、御都合之程も如何敷奉存候得共、大浜村□盛やかな宮良、自分造作を以築広度申出趣有之事御座候間、成合申儀御座候ハヽ何卒時節見合築広候様御免被仰付、左候而右かな宮良江者相当之勲功御取持被仰付被下度奉存候、此等之趣何分ニも可然様被仰上可被下儀奉頼候、以上

丑正月廿□日　名前右同（注，桃里目差（崎原當貴）と与人のこと）」

盛山村には1900尋（1尋を6尺とすると，約3.4km）程の猪垣が築かれていたが，8人の正男（貢納義務のある成人男性）が寄人として加わり，彼らの分の畑を開くため猪垣を新たに1706尋（約3km）程拡張しなければならない。ところが，盛山村は人口が少なく，人手がないため築けずに困っていた。そこへ大浜村の上盛屋のカナ（資料中で不詳文字となっているが，後段に「上盛」とある）なる人物から築造の費用を提供するという申し出があり，許可の取り計らいとともに，このカナ氏に褒賞を与えるよう村人から願い出されたのである。

その後，この猪垣は築かれたが，翌1878年3月に間切の頭らが見分した際，「右かな築立之猪垣、訴差与者相替別而広過候、付而者不人足之別而如何之事候間、屹与築責（狭カ）所持させ候様」言い渡されている。すなわち，届け出たものよりも広く，人口が少ない村では，管理のための個人の負担が大きくなるので，狭くするように命じられた。しかし，村人達はこれに対して「所中江も吟味被御申渡候処、今程所持可罷成段申出候付」

と，現状維持の方針を示している。

同年７月１日には，台風の襲来によって猪垣が壊れたため修復がおこなわれた。そして，修理作業の翌日，この猪垣をどうするか村人達と再び話し合いがもたれた。その際，當貴（日記の著者）は，村人達に「当分猪垣惣長千九百六尋有之、正男六人・寄人八人・居住奉公人六人、都合弐拾人□□、壱人ニ而九拾五尋、丈ニシテ四拾七丈ニ及候処、大風之節惣崩抔いたし候ハ、礑与可及難儀段申聞候」と問題を提起した。しかし，これに対しても，村人達は「一昨日嵐ニ大抵三部壱程崩落候処，当分之人足ニ而昨日日中ニ修甫調置候付而者，何程大破ニ而も弐日之日数ニ而者全修甫可相調」と答え，新たに造られた猪垣の維持を再び主張したのである。

この上盛屋カナが如何なる人物で，盛山村の村人達とどのような関係があり資財を供したのか，といった詳細は不明である。しかし，猪垣を築くには，事前に役人（間切の頭）へ計画を示し，許可が必要とされていた。そして，築かれた猪垣は役人によって見分されたが，その時，役人らは猪垣の長さに注意し，村人達が維持管理できるかどうか調べていたのである。

(2) 築造における村間の協力

盛山村では，別の場所と思われる猪垣が1877年4月に造られており，その経緯も日記に記されている。その発端に「□（同カ）日、盛山村百姓等并寄人共木綿花畠明開させ□（候カ）得共、当分白保村牛馬牧内故盛生無之、加之当年者木綿はな蒔入候迄ニ而隙打いたし候詮無之、胡麻・真黍播入候ハヽ土□為筋相成事候間、右地拵仕置候分ハ早々猪垣築廻候様申達候」とあり，「猪垣も被築広長三百五拾尋、丈ニシテ百七拾五丈候得者居住奉公人雇入加勢を以築立候ハヽ、人足弐拾九人ニ及壱人ニ而六丈三寸ツヽ相当□、日数三日ニ者首尾取相成候見込ニ而明未明ヨリ人夫差出相働せ候様申渡候事」と記されている。

作業は翌日未明より始まったものの，２日目には人夫が疲れたため，親村である桃里村の村人達へ加勢が願い出された。そこで，「夜之二更（ふたこう）桃里村詰宿相届、筆者并世持人村中呼寄右之趣申聞せ、桃里村も七月江者新敷江引越候付而者僅之人足ニ而者思様不行届、其期ニ者盛山村人夫雇入候外無他事次第候間、此涯無厭相働候様申達候処、世持始村中ニも随分加勢支度段申出候付、左候ハヽ未明ヨリ差越相働候段申達候事」となった。目差であった當貴が桃里村へ交渉に行き，盛山村村人が桃里村の引越し（村敷替）の時に加勢することを交換条件とし，この猪垣築造の協力を了承させたのである。こうして翌日から桃里村村人も加わり予定通り３日間で築造を終えた。

この時，加勢に加わった桃里村村人の人数は明記されていないものの，猪垣建設に多大な労働力を要したことが十分理解できる。上記のように，村人30人では，175丈（約525m）を３日間で築くことができなかったのである。地形や構造によって異なるであろうが，単純に計算すると，１人当り１日６ｍ程を築くことさえも容易な作業でなかったことが分かる。

以上みてきたように，19世紀後半の盛山・桃里村では，猪垣築造において予め役人が計画を調べたり，築かれた猪垣を間切の頭らが見分したりしていた。また，１村のみで築くのが困難な時，他村へ行って協力を要請し村間を調整する役割も，村に赴任していた地方役人が担っていた。猪垣の維持管理は役人にとっての関心事であった。

ただし，それら役人の指示は，主に猪垣の長さに基づいたものであった。前者の事例では，台風による補修作業後の話し合い時に，一人当たりの長さに換算して維持管理が困難であることを，當貴は村人達に説得しようとしている。また，後者の事例でも，當貴は築

く猪垣の長さを村の正男人数で割って工期を算出しているように，築造時においても長さに基づき計画が立てられている。それに対し，計画通り作業が進まず，また，維持管理においても村人達は異議を唱えている。実際の築造や維持管理は，役人が考えるように村人の数（労働力や維持管理能力）と猪垣の長さの関係のみで単純に推しはかることのできないものだったといえる。

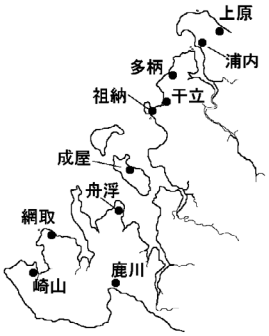
Ⅳ．西表島西部の猪垣遺構の構造と配置形態

(1) 諸村の概況

それでは，村人達によって築かれた猪垣はどのようなものだったのだろうか。猪垣に関する史資料は散見するが，当地方では猪垣遺構の現地調査がほとんどなされておらず，猪垣の構造やどのような場所にどれ位の長さで築かれていたのか（配置形態）といった詳細は不明である。また，放棄されて久しく，毎年襲来する台風や開発工事によってほとんどが崩壊している。そのなかで西表島西部の祖納岳山麓および崎山半島，網取半島にある猪垣（遺構）はほぼ原型をとどめて残存しており注目される。そこで，以下では，これら3箇所の猪垣の構造や配置形態について明らかにしたい。

西表島は八重山群島最大の島であり（面積約289km^2），山地の卓越した高島[38]である。その中央部は亜熱帯照葉樹林によって広く覆われ，古見岳（標高470m）を最高峰として，なだらかな尾根で峰々が連なっている。そして，そこに小さな支沢が細かく入り組み非常に複雑な地形をなしている。その一方，山裾は急峻である所が多く，浦内川や仲間川など大河川の侵蝕による深い谷もみられる。島の東部，北部には海岸線から山裾にかけて緩斜面が広がるが，西部，南部では山裾が海岸線まで迫り，平地が乏しい。西部の海岸は湾入が多く複雑である。

琉球王府統治時代の西表島西部に存在していた村の変遷を『八重山年来記』[39]と『参遣状』[40]を手がかりとして図3にまとめた。元々，西部には西表村と慶田城村という，幾



村名	1737年
西表村	688
◎祖納	242
干立	254
浦内	93
多柄	53
上原	66
慶田城村	558
◎祖納	381
成屋	30
舟浮	56
網取	49
鹿川	42

祖納・網取・鹿川・波照間村から寄人

役人

村人

村名	1760年	1873年
西表村（のち上原村）	943	－
◎上原	－	不明
干立	－	130
浦内	－	41
多柄	－	73
慶田城村（のち西表村）	616	337
◎祖納	－	270
成屋	－	13
舟浮	－	54
崎山村	372	167
◎崎山（新村）	－	64
網取	－	42
鹿川	－	61

表中の数字の単位は全て（人）

図3　西表島西部の村の変遷と人口

資料：1737年・1760年：『参遣状』（石垣市史叢書9，1995）
1873年：『琉球八重山嶋取調書（全）』（沖縄研究資料21，法政大学沖縄文化研究所発行，2004）

つかの枝村を含む行政村があり，その両村の村番所が祖納半島の祖納村におかれていた[41]。しかし，西表村の枝村であった上原村は，祖納村から遠く不便であるなどの理由から，1767年，西表村の村番所が上原村に移った。また同じ頃，崎山村が新たに崎山半島に建てられ，慶田城村に含まれていた網取村と鹿川村は崎山村の枝村とされた。その後1768年に，西表村は上原村と名を変え，それにつれ慶田城村は西表村と称されるようになった[42]。

現在，祖納岳山麓にある猪垣は祖納村のものである。崎山半島と網取半島にあるのは，それぞれ崎山村，網取村のものであるが，両村とも廃村となり，現在，屋敷周りの石垣など，集落（住居やその周囲の屋敷畑）跡のみが残る。先述したように，それぞれの猪垣のおおまかな築造経緯については記録，伝承が残されており，すべて1700年代中頃である。図３には，記録の残っている1737年，1760年，および大津波後の1873年の各村の人口を併記した。1760年は行政村単位でしか記されていないが，1737年や1873年の人口の比を参考にすると，祖納村の人口は崎山村や網取村よりもかなり多かったと思われる。

(2) 祖納岳山麓の猪垣の構造

これら三つの猪垣のうち，現地調査の結果から，まず祖納岳山麓の猪垣に関してのみ構造を示す。

調査は2003年７月から10月にかけて計16日間おこない，猪垣を直線５ｍずつに分け，その方位を記録した。さらに，「石垣」，「切り土」，「自然物」（大岩や崖など）の三つに構造を区分して観察し，各区間で距離にして最も長いものをその区間の構造とした。石垣は石を積んで障壁をつくっているものであり，切り土は斜面を削り障壁としているものである。切り土の上に石が積まれているものや，明らかに人の手で大岩の間に小石が埋められていると分かるものは石垣とした。石垣の場合，始点での鉛直の高さも計測した。

図４にその結果を示した。祖納岳山麓の猪垣の全長は約1.8kmであり，そのうち石垣と切り土を合わせ，人の手が加えられて造られた部分は全体の約８割に及ぶ。その半分以上を占める石垣は，斜面を削り，切り面に石垣を積んだ「石壁」と，ほぼ平坦な所に石を積んでつくられた「石塁」の二つのタイプからなる。石垣の外側に溝を掘っているかどうかは土砂が堆積していることもあり不明瞭である。石垣の高さは平均で約120cmであり，横長の野石を乱石状に７～15層程積んでいる（図５）。この祖納岳山麓の猪垣では確認できなかったが，網取半島の猪垣の場合，直方体状に加工された石を積んだ石垣もみられる。

用いられている野石は砂岩が大部分を占めるが，与那田川の近くの部分にはわずかながらサンゴ由来の石が混用されている。祖納岳

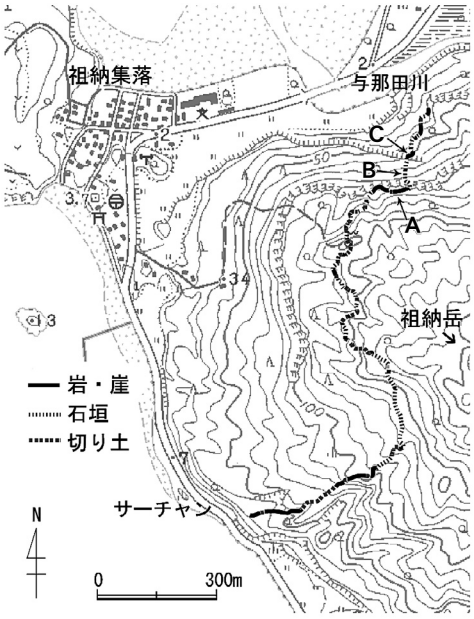


図４　祖納岳山麓の猪垣の構造

基図は1：25, 000地形図「船浦」を使用。
2003年の現地調査より作成。

図 5　祖納岳山麓猪垣の石垣
（2003年　著者撮影）

の猪垣にはみられなかったが，崎山半島や網取半島の猪垣には，テーブル状のサンゴ塊が切り土に立てかけられていたり，石垣の上の部分にひさしのように置かれていたりと，イノシシが登れないようにする工夫がなされている。これは沖縄島北部の大宜味村の猪垣においても報告されており[43]，島の周囲にサンゴ礁が発達した沖縄地方特有の構造である。

末端のサーチャン（地名）側は支沢沿いの崖を利用している。そこから中間は，祖納岳からのびる広くなだらかな尾根を横切っているが，この部分は，地図に現れないような小さな起伏に富んでいる。そのような凹地（小さな沢部）やほとんど傾斜のないところでは石垣を積み，小さな凸地では切り土がなされており，地形に応じて石垣と切り土を組み合わせて猪垣が構築されている。一方，与那田川側の斜面では起伏が乏しく，猪垣の内側（集落側）が外側（山側）より低くなるためイノシシが容易に垣根を飛び越えてしまうという問題が生じる。そこで，斜面の所々にある断崖や急斜面（図４中のＡやＣの部分）を猪垣として用いている。猪垣の内を外よりも大きく下げることによってイノシシが降りにくくしているのであり逆転的な構造といえる。そして，この両区間の間のＢの部分は，斜面方向に上下ほぼ一直線になるよう石垣が積まれている。この場合，猪垣の外側と内側の高低差がほとんどないため，石垣を築くことでイノシシの侵入を効果的に防ぐことができる。以上のように，祖納岳山麓の猪垣は大部分が人の手によって造られているが，それは地形を巧みに利用したものであったといえる。

(3) 西部３村での猪垣の配置形態

次に，祖納岳山麓の猪垣に加えて，崎山半島と網取半島の猪垣についても，それぞれの位置を現地調査の結果にもとづき図６に示した。

崎山半島の猪垣に関しては2003年９月から10月にかけての計10日間，網取半島の猪垣については2003年11月及び2007年２月の計２日間，現地調査をおこなった。この２箇所の猪垣に関しては先の構造調査と異なり，まず最初に石垣などがしっかりと残っている確証点を探し，そこを起点に見失わないよう探しつつ，猪垣に沿って歩き，GPS（Garmin社製eTrex）及び国土地理院発行の地形図を用いて記録した。少なくとも50ｍに１回は測位するようにし，GPSデータは測位衛星数が４つ以上で，表示誤差が15m以下の捕捉点のみを用いて，地図化ソフトウェア[44]によって地形図と重ねた合わせた。

崎山半島の猪垣は，崎山集落跡の東側を南北に流れるパインタ川沿いにある。支沢をつたい尾根を越えて西海岸へと続き，半島を横断するように築かれている。パインタ川河口付近は痕跡が見当たらず不明瞭であるが，全長は約３kmに及ぶ。

網取半島の猪垣も，集落周辺（水田跡）では痕跡が見当たらなかったが，集落背後の支沢沿いに半島を横断する形で築かれている。半島の反対側（東側）の終点は断崖となっている。明瞭な部分だけで約600ｍ程である。先に挙げた川平氏と山田氏の生活誌にも，両村の猪垣の位置が大まかに述べられ図示され

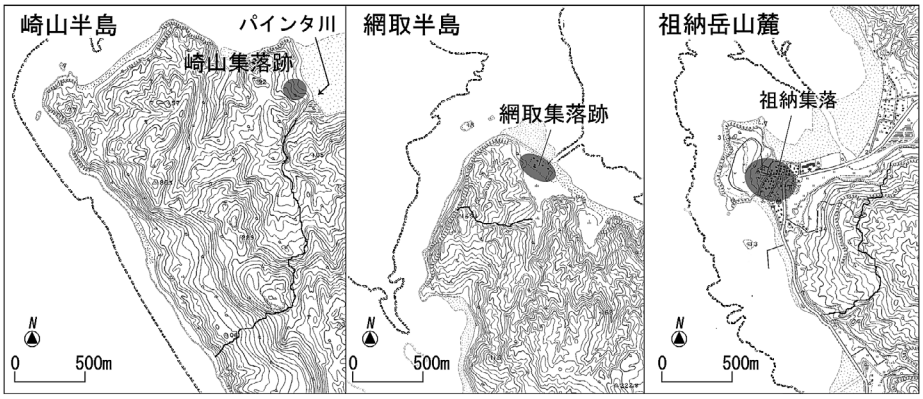


図 6　西部 3 箇所の猪垣の配置形態

実線が猪垣を示す。
基図は1 : 25, 000地形図「ウビラ石」,「舟浮」,「船浦」を使用。
2003年と2007年の現地調査より作成。

ているが[45]，本調査の結果はこれらとほぼ一致している。

琉球王府統治時代の西表島西部には他にも干立村や浦内村，上原村などいくつかの村があったが，それらの村での猪垣に関しては未調査であり，実態は不明である。しかし，調査をおこなった 3 箇所の猪垣の場合，各村の集落は半島に位置しており，その集落を囲むのではなく，半島を横切る形で先端部分を丸ごと封じるという形態の共通点がみられる。舟浮（近年の表記では船浮）村も琉球王府時代から続く村で，集落の位置は現在と変わっていない。そして，祖納村，崎山村，網取村の三つの村と同様，半島に位置している。2007年 3 月におこなった予備的な踏査では，猪垣の石垣の一部が集落南側の中腹斜面で確認できた。それ以外の部分は崩壊しており不明瞭であったが，集落背後（西側）には全くそれらしき跡は見当たらず，この猪垣も半島を横切るよう築かれていたと推察される。矢ヶ崎は，全国の猪垣に関し，囲繞型（城郭型）と分界型（長城型）という二つの形態の区分を試み[46]，八重山の猪垣は各集落を囲む囲繞型である点を特色として挙げている[47]。しかし，これら 3 箇所の猪垣のように，半島など地形によっては，集落近傍を囲まない形態の猪垣もみられるのである。

また，これら猪垣の末端部分は河川や小さな沢，そして海岸端の断崖と連結されている。このことによって猪垣の端を確実にふさぐことができ，この点も地形を活用した技術として注目される。

以上のように，3 箇所の猪垣には半島横断型とも呼べる形態上の共通点はあるものの，長さがそれぞれ異なっている。崎山半島は約 3 km と最も長いが，村の人口では先述したように祖納村のほうがはるかに多かったと考えられる。このような形態の猪垣が築かれた地理的要因を考えるには，猪垣周辺での土地利用の実態を明らかにすることが必要であり，今後の課題である。しかし，実際に築かれた猪垣は，役人が考えるように村の人数のみに対応したものでなかったことが遺構の調査から示唆される。

Ⅴ．おわりに

沖縄八重山地方の石垣島と西表島の両島において，かつて多くの猪垣が築かれていたことはこれまで報告されていたが，その社会的背景には，役人の強い働きかけがあったこと

が本稿で明らかとなった。築造時には村同士を協力させ，労力を調整していた。これは，1700年代に頻発した新村建設にかかわる史料や伝承から窺い知ることができる。さらに1870年代の役人日記にもその具体的な様子が示されており，通時的におこなわれていたと考えられる。

しかし，為政者側がそのように築造を推進しようとする意図は，明和の大津波（1771年）前後で，各村の人口や社会状況が変わるなか異なっていた。すなわち，大津波以前の人口増加期には，農本主義に基づく勧農が推し進められ，そのなかで猪垣は各村必須の社会基盤とみなされていた。狩猟を禁じようとしたように，農民の浪費を取り締まり，農業生産を上げることに重点が置かれ，猪垣築造をその手段の一つとして為政者側は位置づけていたのである。これに対し，大津波以降，日常の食糧確保の重要性が高まり，猪垣築造を農民生活における逼迫した課題と捉えるようになっていた。

それは，大津波以降，維持管理においても積極的に役人が関与したこととも無関係ではないと思われる。築いた猪垣が放棄されることのないよう役人達は築造前の計画を調べたり，完成した猪垣を点検したりしていた。また，「猪垣当」という村役目を各村で設け，猪垣の日常的な見廻りにあたらせていたのである。ただし，このような見廻りの制度化が大津波以前もなされていたかどうかは現時点で不明である。猪垣当について記されている『富川親方八重山島諸村公事帳』は，富川親方による1874年の八重山巡検後，それ以前の検使らによって組立てられていたものを再整理したものといわれている。しかし，それら元となったものの所在が不明であるため，猪垣当がいつ頃設けられたのかは分からない[48]。もっとも，同じように富川親方によって改訂された『富川親方八重山農務帳』[49] には，「役々勤方并諸事締方之事」の一つとして，猪垣が村人達によって管理されているかを地方の役人達が定期的に巡検するよう指示している。しかし，このような条文は大津波以前の『与世山親方八重山農務帳』[50] には記されていない。このことは，大津波以降にこのような役人の関与が強まったことを傍証していると思われる。

各村当たりの猪垣当の人数は，同一島内であっても村によって異なっていた。特に，西表島西部の西表村と崎山村は突出して多い。その詳細な理由は不明であるが，それぞれ行政村に含まれる各村の集落（西表村では祖納村・成屋村・舟浮村，崎山村では崎山村・網取村・鹿川村[51]）が，海で隔てられ，離れて立地していたこととも無関係ではないだろう。本稿でみたように，当地域では，それぞれ独立した猪垣が築かれているが，これらの村間を陸路で移動するのは困難である。そのためこれらの村では毎日見廻りをおこなう猪垣当を多めに設けていたと推察される。

ところで，役人が猪垣に関して村人達に指示を与える際，村の成人男性の数（維持管理能力）に対する猪垣の長さを重要視していたことには注意すべきである。猪垣が長すぎると維持管理の負担が増し，放棄につながると考えていたのである。しかし，実際は，西表島西部の3箇所での猪垣が示しているように，その長さは村の人口に必ずしも対応していない。

これら三つの村の集落は，それぞれ半島に位置しており，猪垣はその半島を横切り，先端部を丸ごと封じるように築かれている。土地利用について本稿では十分明らかにできず，なぜこのような形態をとっているのかは不明である。ただし，原理的にいえば，半島の幅が狭い場合，このように猪垣を築くことによって短い距離でより広い面積の土地を守ることが可能になるのであり，形態を規定した要因の一つとして考慮すべきであろう。それと同時に，これらの猪垣は地形を利用して

築かれていることが構造・形態の特徴として指摘できる。すべてに石垣を築くのではなく，大岩や断崖などの自然物に連結させ猪垣の一部としたり，傾斜や微地形に応じて切り土も用いられている。このように石垣部分を短くすれば，集石作業を減らすことができ，築造時の省力化に大きく寄与したと思われる。さらに，猪垣の両端は海岸端や河岸の断崖となっていることが多く，確実に端をふさぐようにしている。末端など要所要所において自然物を利用することで耐久性を高めることができ，それは台風の多い当地域で猪垣を維持する上で極めて重要な工法であったことは間違いない。しかし，役人日記の記述からは，役人が実際の猪垣の築造や修復工程を詳細に把握しているわけではなく，その構造についても正確に理解していなかった可能性が示唆される。

以上のように，当地方で18世紀から19世紀にかけて猪垣築造が盛んになされた社会的背景には，為政者側の強い働きかけがあったといえる。しかし，それらの指示は，地理的な条件など各村現場での細かな状況を踏まえたものではなく，実際は村人達によって主体的に決定され，運用される部分も大きかったと考えられる。塚本も，信州伊那谷など数カ所の事例にふれ，猪垣築造が領主の仕事であったかのかたちを示すものの，実際の企画や設計は村方にあったのであり，領主は実状を掌握し切れていなかった可能性について言及している[52]。

1903年に人頭税が廃止され，役人の働きかけが弱まるなか，八重山地方の猪垣は管理されなくなり，放棄されていった。しかし，その過程は村によって異なったようである[53]。そのような猪垣の放棄の過程を，それぞれの場所での土地利用形態の変化や維持管理方法の推移に着目し，実証的に明らかにすることは今後の課題としたい。

（国立民族学博物館・外来研究員）

〔附記〕

本稿のもととなる現地調査は，西表島の多くの方々の温かな励ましと支えなしには成しえませんでした。本稿をまとめるにあたり，奈良大学教授の高橋春成氏，琉球大学教授の里井洋一氏，ならびに国立民族学博物館外来研究員の橋村修氏から有益なコメントをいただきました。また，査読者の方々からも非常に数多くの有意義なご指摘をいただきました。記して謝意を表します。

〔注〕

1）金網や電気柵，トタン板などの人工物を素材とした現代的な防除囲いも猪垣と呼ばれることがある。しかし，本稿での猪垣は，特に断らない場合，木や竹，土石などの自然物を用い，何人か共同で築かれた構造物を指す。

2）羽山伸一『野生動物問題』，地人書館，2001，40～55頁。

3）花井正光「亜熱帯の島の多様な猪垣―西表島の地域文化財としての猪垣とその活用の意義」，地理48-5，2003，94～101頁。

4）齋藤　忠「猪垣遺蹟考」，歴史地理63，1934，307～323頁。

5）①井上　穎「『シシ垣』についての一考察」，京都学園大学論集14-2，1985，164～176頁。②大宜味村教育委員会編『大宜味村の猪垣―猪垣調査報告書―』（大宜味村文化財調査報告書第３集），大宜味村教育委員会，1994，46頁。

6）岡本大二郎『虫獣除けの原風景』，日本植物防疫協会，1992，147～178頁。

7）①矢ヶ﨑孝雄「猪垣（ししがき）の分布について」，文教大学教育学部紀要23，1989，11～22頁。②矢ヶ﨑孝雄「長崎県下の猪垣（一）」，文教大学教育学部紀要24，1990，12～24頁。③矢ヶ﨑孝雄「長崎県下の猪垣（二）」，文教大学教育学部紀要25，1991，26～42頁。④矢ヶ﨑孝雄「沖縄県下の猪垣（一）」，文教大学教育学部紀要26，1992，14～26頁。⑤矢ヶ﨑孝雄「沖縄県下の猪垣（二）―沖縄本島―」，文教大学教育学部紀要27，1993，1～16頁。⑥矢ヶ﨑孝雄「沖縄

県下の猪垣（三）―八重山―」，文教大学教育学部紀要28，1994，34～49頁。⑦矢ヶ﨑孝雄「猪垣にみるイノシシとの攻防―近世日本における諸相」（高橋春成編『イノシシと人間―共に生きる』，古今書院，2001），122～170頁。

8）千葉徳爾「伊那谷における猪・鹿の盛衰」，信州大学教育学部研究論集14，1962，182～195頁。

9）前掲７）⑥。

10）豊見山和行「総論『近世琉球』という時代」（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編『沖縄県史　各論編　第4巻　近世』，沖縄県教育委員会，2005），1～26頁。

11）安良城盛昭『新・沖縄史論』，沖縄タイムス社，1980，76～85頁。

12）新城は，八重山地方における新村設置についてまとめ，1700年代に４回集中しておこなわれたことを明らかにしている。また，それらは耕地と人口との関係だけでなく，人口が多くて下知に支障があったという事情や，宿次，津口の問題など複数の要件を勘案しておこなわれたこと，さらに，後半の２回は杣山の管理問題とも関連していたことを指摘している。新城敏男「近世八重山の新村設置と杣山統制」（地方史研究協議会編『琉球・沖縄：その歴史と日本史像』，雄山閣，1987），156～178頁。

13）牧野　清『明和の大津波』，著者出版，1968，133頁。

14）千葉徳爾「八重山諸島におけるマラリアと住民」，地理学評論45-7，1972，461～474頁。

15）高良倉吉「近世末期の八重山統治と人口問題―翁長親方仕置とその背景―」，沖縄史料編集所紀要７，1982，1～45頁。

16）黒島為一「人頭税」（琉球新報社編『新琉球史―近世編（下）―』，琉球新報社，1990（初版）），129～167頁。

17）高良は津波直後の約10年間を激減期と名付け，そののち1780年代以降を慢性的な低落期としている（前掲15））。

18）石垣市総務部市史編集室編『参遣状抜書（上巻）』（石垣市史叢書８），石垣市，1998，82頁。

19）崎山村の村建てに関して，『八重山年来記』（後掲37）76頁）では1755（乾隆20）年とされているが，『慶来慶田城由来記』（後掲23）18頁）では1767（乾隆32）年と，異なる年が記されている。崎山村は，最初，崎山半島先端部にあるヌバン浜のカニクジ（砂が堆積したところ）に建設されたが，風や波が強いこと，舟を引き入れておく場所がないことから，数年後に崎山湾奥部のパインタ川河口に移転されたと伝承されている（後掲21）84～85頁）。このことが上記のように異なる年が記された理由であると推測される。

20）前掲19）参照。

21）川平永美述，安渓遊地・安渓貴子編『崎山節のふるさと―西表島の歌と昔話―』，ひるぎ社，1990，86～87頁。

22）山田武男著，安渓遊地・安渓貴子編『わが故郷アントゥリ―西表・網取村の民俗と古謡―』，ひるぎ社，1986，109～110頁。

23）石垣市総務部市史編集室編『慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸締帳』（石垣市史叢書1），石垣市役所，1991，18～19頁。

24）外離島と内離島の両島へ通い耕作をしていたのは，これらの島にはイノシシがいないためであった。両島にも古くはイノシシが棲息していたようであるが，『慶来慶田城由来記』（前掲23）17頁）によると，1728（雍正６）年から数年かけてイノシシを根絶させ，畑地を切り開いたとされる。

25）石垣市総務部市史編集室編『与世山親方八重山島規模帳』（石垣市史叢書２），石垣市役所，1992，46頁。

26）前掲25）64頁。

27）石垣市総務部市史編集室編『大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』，石垣市，1998，120頁。

28）これら地方役人らの褒賞は，蔵元の在番や頭が王府へ申請しておこなわれたが，実際は蔵元がきちんと状況を調べて申請していなかった可能性があること，そして，それに対して王府側が改めるよう幾度か指示していたことを新城は指摘している。新城敏

男「近世八重山の役人と勧農」（沖縄国際大学南島文化研究所編『近世琉球の租税制度と人頭税』，日本経済評論社，2003），65～83頁。

29）球陽研究會編『球陽　読み下し編』（沖縄文化史料集成５），角川書店，1978（1974初版），793頁。

30）石垣市総務部市史編集室編『翁長親方八重山島規模帳』（石垣市史叢書７），石垣市役所，1994，73～74頁。

31）石垣市総務部市史編集室編『富川親方八重山島諸村公事帳』（石垣市史叢書３），石垣市役所，1992，18～24頁。

32）前掲７）⑥。

33）「沖縄県間切島吏員規定」（1897年公布）の実施に伴い，蔵元は郡役場となった。そして首里大屋古，与人，目差といった諸村の地方役人職は廃止され，代わりに村頭という職が設けられた。

34）竹富町史編集委員会町史編集委員室編『竹富町史　第10巻資料編　近代２』，竹富町役場，2002，74頁。

35）石垣市総務部市史編集課編『目差役被仰付候以来日記』（石垣市史叢書15），石垣市，2006，110頁。

36）得能壽美「近世八重山農村の様相」，沖縄文化65，1985，8～21頁。

37）石垣市総務部市史編集室編『八重山年来記』（石垣市史叢書13），石垣市，1999，91～92頁。

38）目崎茂和「琉球列島における島の地形的分類とその帯状分布」，琉球列島の地質学研究５，1980，91～101頁。

39）前掲37）73，76頁。

40）前掲18）44～45頁。

41）現在の祖納集落の西側に小高い丘の広がる祖納半島がある。かつては，ここにも集落が広がり，上村（ウイムラ）と呼ばれていた。生活水確保が困難であったなどの事情から，下村の湿田地帯が埋め立てられると次第に下へ移り住むようになり，昭和初頭に上村は完全な無人地となったと伝えられている。沖縄県教育庁文化課編『西表島上村遺跡―重要遺跡確認調査報告―』（沖縄県文化財調査報告書　第98集），沖縄県教育委員会，1991，196頁。

42）前掲23）17～18頁。

43）前掲５）②。

44）カシミール3D，http://www.kashmir3d.com/（2008年8月アクセス）。

45）前掲21）56～57頁，及び前掲22）86～87頁。

46）前掲7）③。

47）前掲7）⑥。

48）前掲31）解題参照。

49）沖縄県立図書館史料編集室編『沖縄県史料』（前近代６　首里王府仕置２），沖縄県教育委員会，1989，455～472頁。

50）前掲49）441～453頁。

51）ただし，祖納村の向かいにある内離島にはイノシシが棲息しておらず（前掲24）参照），ここにあった成屋村には猪垣がなかったと思われる。また，鹿川村（1913年頃廃村）については未調査であり詳細は不明である。安渓は廃村跡を調査し，生活の復原研究をおこなったが，猪垣遺構に関しては具体的にふれていない。安渓遊地「八重山群島西表島廃村鹿川の生活復原」（伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然誌』，雄山閣，1977），301～375頁。

52）塚本　学『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア』（平凡社選書80），平凡社，1983，278～283頁。

53）例えば，廃村以前の網取村に暮らしていた山田雪子氏は，猪垣の見廻りが廃村（1972年）直前までおこなわれていたことを生活誌のなかで記している。また，石垣島の川平村の字誌によれば，日常的な猪垣の管理や猪害の調査をおこない，イノシシの侵入を発見するとすぐに部落役人に報告する猪垣補佐という村役職が1937年代まであったことが記録されている。山田雪子述，安渓貴子・安渓遊地編『西表島に生きる―おばあちゃんの自然生活誌―』，ひるぎ社，1992，140頁。川平村の歴史編纂委員会編『川平村の歴史』，川平公民館，1976，218～220頁。

The Social Background Relating to the Construction of Shishigakis in the Yaeyama Region, Okinawa

EBIHARA Ippei

In the Edo period, especially from the 1700s to the 1800s, the local people in rural areas began to make cooperative efforts toward the construction of long walls, which were mainly built using stone-blocks, around their agricultural fields. The aim was to prevent wild animals, such as wild boars and deer, from damaging the crops. The walls, which were referred to by terms such as "shishigaki," extended far across the west of the Kanto region. Ishigaki and Iriomote Island in the Yaeyama region in the southern part of Okinawa are noteworthy for their many shishigakis that were built in the Ryukyu era. The objective of the present study is to discuss the social background relating to the construction of shishigaki in these islands, based on the governmental records and the results of the field studies on the shishigaki ruins; the focus of the investigation is on the local officers' supervision of the construction and maintenance of the shishigakis.

The author studied some records and traditions that suggested that the shishigakis were constructed in both the islands from the middle to the late 1700s. This period was characterized by a rapid increase in the population of the region, and the governor encouraged the villagers to engage in agriculture in order to sustain the kingdom. As a result, shishigakis became a crucial part of the social infrastructure for each village and the governor endorsed their construction around farms through the requisition of manpower from the adjacent villages. The terrible tsunami disaster of 1771 led to a decline in the population and caused depressed situations in many villages. This seemed to have increased the local officers' involvement in the maintenance of the shishigakis in each village, to ensure food security. The officers appointed some villagers as "igakiatari," those in charge of maintaining the shishigakis and patrolling each shishigaki on a daily basis. The local officers also inspected the plans of the shishigakis before construction as well as the completed structures. On their supervision, the officers primarily paid attention to the adequate length of the wall for the amount of manpower required by each village to maintain. However, the results of my field research on the shishigaki ruins in the western part of the Iriomote Island revealed that the walls were built after taking into account the topographic features of the region and, furthermore, that their lengths did not always correspond to the population of the villages, as was shown in the records. We can, therefore, conclude that although the involvement of the authorities was certainly effective in the construction and maintenance of shishigakis in this region, the villagers' contribution was also important in undertaking these processes at local levels.

Key words: agricultural defensive wall (shishigaki), local governance,
tsunami disaster in the Meiwa period, population change